令和七年度

得意型

国語問題

〔注意事項〕

一、試験開始の合図があるまで、開かないこと。

二、問題は一～三で、二十三ページにわたって印刷してあります。
ページが抜けるなどしていた場合には、試験監督の先生に申し出なさい。

三、解答は、すべて解答用紙に記入し、**受験番号・氏名**をもれなく、正確に記入すること。

四、問題冊子の表紙にも、**受験番号・氏名**を必ず記入すること。

受験番号

氏名

一

次の①～⑩の――線部について、漢字はその読みをひらがなで、カタカナは漢字に直して書きなさい。

① 新しい**眼鏡**を買う。

② とつぜん、**悲鳴**が聞こえた。

③ 彼女（かのじょ）の**歌唱**力はすばらしい。

④ 王として、国を**治**める。

⑤ 冬のオホーツク海**沿岸**で、流氷を見る。

⑥ 彼は、**レイセツ**を重んじる人です。

⑦ 多くの人に**モンコ**をひらく。

⑧ 秋は、**ナシ**のおいしい季節です。

⑨ 新しい校舎を**ケンセツ**する。

⑩ 「**ホトケ**の顔も三度まで」ということばがあります。

◎文中からそのまま抜き出して答える場合、句読点や記号は一字とすること。また、ふりがなのある漢字は、ふりがなをつけなくてもかまいません。

二

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

この文章は、主人公である小学六年生の石川七海が、校庭のベンチに座って、親友の南詩乃と話している場面から始まります。

昼休み、詩乃と校庭のベンチにすわってしゃべっていた。

初秋のさわやかな風が、頭上の木の葉をゆらしてカサカサと音を立てている。

わたしはこの音が好きだ。

詩乃は演劇教室でやりたい役をやらせてもらえることになって、毎日はしゃいでいる。今日も、興奮してずっとしゃべりつづけている。①

話をひと通り聞いてから、わたしは本音を言った。

「主人公かと思ったのに、主人公と仲の悪い不良の子の役なんて、意外だな」

「そお？」

「うん。詩乃のイメージじゃないっていうか。どうしてそんな役をやりたいの？」

自分ならそんな役はいやだなと、正直思う。

「おもしろいから！　すごく複雑な性格の子でね、良い子の主人公より、演じがいがあるの。最初は主人公に推薦されていたんだけど、みんなをなんとか説得できたの！」

「そっか、そんなものかねぇ」

とりあえずそう言っておいた。今わたしの頭の中は家族のことでいっぱいで、詩乃の役の話にはあまり興味が持てない。

わたしは遠くを見ながら、ぼんやりと詩乃の話を聞いていた。

②そのうちに、詩乃の声がだんだん遠ざかっていき、低空飛行のジェット機のエンジン音や、遠くで聞こえるサイレンなどのほうが耳に入ってきた。

しまいには、頭上の葉擦(注1)れの音のほうが、詩乃の声よりハッキリと聞こえていた。

ふと気がついて横を見ると、詩乃はまだペラペラしゃべっていた。

よくしゃべるなあ。

話がとぎれた瞬間。

③「いいよねえ。詩乃には悩みがなくて」

なんて、ポロッと口から出てしまった。

「え？」

「能天気でうらやましい」

「えーっ、能天気なんてひどい。ちょっと演劇教室の話を聞いてもらいたかっただけよ。もしかして七海、ぜんぜん話を聞いてなかったんじゃない？」

「ごめん、わたしの頭の中、今それどころじゃなくてさ」

「また幸さんのこと？」

わたしは小さくうなずいた。

「あまり深く考えないほうがいいよ！」

簡単に言うなあ。

わたしだって、考えたくないよ。
「わかってるけど……幸ちゃんにおかあさんを取られちゃった感じ」
「七海ったら、おおげさだよ。幸さんが元気になるまで、しばらくのがまんだよ」
「そうかな。しばらくって、いつまでかわからないんだよ？」
「永遠に続くわけじゃないでしょう？」
「どうかな。こんなんだったら、おかあさんが結婚なんかしないほうがよかった。ずっと母子家庭でよかったのに」
④ふうう、と大きなため息をつくと、詩乃がわたしの頭の上に手をのせた。
「そんなことばかり考えていると、七海の心が病んじゃうよ？　しばらくはしょうがないって割りきって、楽しいことを考えて、明るくポジティブ(注2)にいこう！」
「ポジティブにね……」
⑤わたしは詩乃の手をつかんでおろした。
この状況で、ポジティブになれるわけがない。
⑥「そう、楽しいことだけ考えて！　ファイティン！」
詩乃のやたらに元気な声が、わたしの脳内をかきまわす。
今のわたしには逆効果だ。
「あのさ、詩乃はわたしが演劇の話を聞いてなかったって文句言ったけど、詩乃だってわたしの話を聞こうとしないじゃない。しかもこっちは、もっと大事なことなんだよ？　詩乃がわたしの立場だったら、そんなふうに明るくできる？」
単刀直入に聞いてみた。
びっくりした表情の詩乃は、ほんの数秒、固まっていた。
そしてすぐにいつもの笑顔になった。

「わたしが七海の立場なら、なるべくいやなことは考えないよ。だって考えたって解決しないし、自分もまわりもつらくなっちゃうでしょ？　がんばってポジティブにしていれば、悩みなんて本当に飛んでいくものよ！」

ああ、詩乃、そんなふうに言わないで。無理だ。

⑦いやなやつになっちゃいそう。

「つまり、わたしがグチとか言うと、詩乃には迷惑なんだね？」

言ってしまった。

「ううん、そんなことない。ただ、そのほうがハッピーかなって……」

詩乃はがんばってつくり笑いをしている。いつもは大好きな詩乃の笑顔も、今はわたしを［　1　］させている。

ああ、切れちゃいそう。ブチっと。

「ポジティブにしていられるわけないじゃん。わたしは詩乃みたいに恵まれてないんだよ。一つもうまくいかない」

「あ、でも」

わたしは詩乃に反論の余地を与えない。

「そりゃ健康に生まれたのはラッキーだろうけど、それさえもアンラッキーな気がしてくるほどなんだよ？　生まれつき容姿に恵まれていて、家庭は円満で、性格もよくて人気者の詩乃には、きっとわたしの気持ちは一生わからないよ！」

早口でまくしたて、わたしは立ち上がった。

「わたしは、ただ七海をはげまそうと思って……」

(注3)困惑した表情の詩乃を置いて、わたしは［　2　］歩いて遠ざかってしまった。

詩乃が悪いわけじゃない。

ただ、こっちが苦しんでいるときに、いつも楽しそうな詩乃を見ていると、腹が立ってきてしまう。

⑧恵まれすぎている人には、傷ついた人の気持ちが想像できないのかもしれない。

詩乃はたしかに優しいんだけど、なんかウソっぽい。
そうだ。詩乃はいつも［　　］みたいに見える。
本当はなにを考えているんだろう？
詩乃の本音はどこにあるんだろう？
いやな性格だな、わたしって。どうしてこう、ものごとを斜めからしか見られないんだろう。
立ち止まろうか。
今ならまだ詩乃のところにもどってゴメンって言えば、仲直りできるだろう。
でも、わたしはそうしなかった。

〈中　略〉

土曜日の午前中、おかあさんが家の中をそうじしている間、わたしはおつかいを頼まれて、近所のコンビニに行った。
コンビニの入り口で、スポーツバッグを持った男子が(注4)たむろしていて、なんとなく入りにくかった。
ソースとからしを選んでいると、声をかけられた。
「あれ、七海じゃん」
ふり向くと、亮介が立っていた。スポーツバッグを肩から下げて、栄養ドリンクを手にしている。
「あ、亮介。めずらしいね、こっちのほうに来るなんて」
亮介の家は少し遠い。ここでバッタリ会うのは意外だった。
「中央グラウンドで練習試合だったからさ」
「あ、そっか。もしかして、毎日プリントやノートのコピーを入れてくれたの、亮介……なわけないか。やっぱ先生だな」
カカカ、と亮介が笑った。

「オレのわけねーじゃん。クラスもちがうし。けど、先生はいちいち児童の家にプリントとか持っていかないでしょ、クソ忙しいだろうし。南さんじゃね？」

「えっ、詩乃？　それはないでしょ。ひとこともメッセージ送ってこないのに、プリントだけポストにぶち込むはずないじゃん」

ヘラヘラと無理に笑うと、亮介が急にまじめな顔つきになった。

「おまえらケンカでもしたの？」

「いや、べつに」

「南さんと一回だけしゃべったけど、おまえのこと心配してたぞ？　登校拒否かもって、すげービビってた」

「は？　ちがうよ。原因不明のナゾの熱だったんだ。でも、プリントは詩乃のわけない。じゃ、わたし行くわ。おかあさんに買い物を頼まれていただけだから。バイバイ」

「おい、七海」

⑨うしろで亮介がまだなにか言いたそうにしていたけど、わたしはさっさとレジでお金を払って、コンビニから飛び出した。

家に帰って、おかあさんにソースとからしを渡してから、亮介の言葉を思い出していた。

――南さんじゃね？

そんなわけない。それに、もし詩乃なら、ひとことぐらいプリントの端っこにメッセージを書くとか、スマホでメッセージを送ってくるとかするはずだ。

⑩でも、わたしの足は自然と外の郵便受けに向かっていた。

いつもみたく小さい差し込み口のフタを開けるだけじゃなくて、鍵つきの大きなほうを開ける。たいてい、差し込み口から引っぱり出せるし、そこから中をのぞけば取り忘れがあるかわかるから、めったに開けないやつ。

小さい封筒かなにか、見落としていたのかな。メッセージが入っていたのかな。

でも、とくになにも入っていない。チラシが数枚。

だよねぇ。期待してバカみたい。

閉じようとして、なにかがヒラヒラと落ちたのが見えた。ピンク色の小さいもの。差し込み口のうら側にも小さなピンク色のものがくっついている。

なんだろう？　と思って手にしてみると、それらはメッセージが書いてあるふせんだった。

えっ、なんでここに？

ああ、ふせんが貼ってあって頭から突っ込まれていたプリントを、わたしがお尻のほうから引っぱり出していたから、出口で引っかかって取れちゃってたのか。

ふせんに書かれているのは、いつもの詩乃の、クセがあってちょっと読みにくい字だ。

全部で七枚。そのうち、最初の日らしいメッセージが二枚分。それからだんだん短くなっていっている。

〈七海へ。どうしたの？　カゼ？　これ、金曜日の宿題のプリントとノート〉

〈PS.（注5）　わたしのノートは読みにくいから、早坂さんのノートを貸してもらって、コンビニでコピーさせてもらった。すごくきれいな字だよね〉

〈メッセージだと未読スルーされると思ったから、今日もふせんにしたよ。七海はおこってるとスマホにさわらないの知ってるし。じゃ、明日ね。詩乃〉

〈七海へ　体育の時間は七海のきらいなとび箱だったよ。今日の宿題と早坂さんのノートです。どうぞおだいじに。詩乃〉

〈もう水曜日。まだ登校は無理なんだね。カゼ？　だいじょうぶ？　詩乃〉

〈まだおこってるのかな。返事をくれるとうれしい。詩乃〉

〈今週もこれで終わり。来週は来られるといいね。詩乃〉

ごめん詩乃。ちゃんとメッセージを書いてくれていたんだね。
なのにわたしは、バカみたいにひねくれて、おこっていた。
自分がきらいだ。[11]なんでこんなに曲がった性格なんだろう！

あわてて家の中に入ると、自分の部屋に行ってスマホを手にした。
なんて書く？
ごめん、今ごろふせんを見つけた。ぜんぶ取り出し口のところで引っかかっていたんだ。今までずっと気がつかなくて……。

ああ、言い訳がましい。
しばらく迷ってから、電話した。
プルルルル。
「もしもし、七海？」
「あ、うん。あのー、ごめん、じつは、うちの郵便受けっていうのは……」
もごもご、長々、言い訳がましいわたしの説明をだまって聞いてくれていた詩乃が、電話口でプッと笑った。
「なんだぁ、そういうことだったのか！　完全に無視されてると思ってた。よかった……。ね、今日、体調はどう？」
「すごくいい。じつはもうずっと平熱だし、月曜日は学校に行こうと思っていたんだ」
「そっか、よかった。じゃあ、中央公園で会わない？」
「うん、図書館の手前のところね。話したいことがたくさんあるんだ」

「じゃ、三時とか、どう？」
「わかった！」
約束をして電話を切った。
⑫ 手のひらにある七枚のふせんを、わたしはそっとノートにはさんだ。

（佐藤まどか『雨の日が好きな人』）

（注1）葉擦れ…風などで、草木の葉がこすれあうこと。
（注2）ポジティブ…積極的であること。ここでは、明るく前向きに考えるようす。
（注3）困惑した…困りはてた。
（注4）たむろしていて…何人かの人が、なんとなく集まっていて。
（注5）ＰＳ．…手紙の追伸（本文の後に、さらにつけ加えることばや文）を表す記号。

問一 ――線①「やりたい役」について、次の（1）・（2）の問いに答えなさい。

（1）どのような役ですか。本文中から十五字以内で探し、そのまま抜き出して答えなさい。

（2）なぜやりたかったのですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が脇役を演じれば、演劇教室のみんなが主役を演じるチャンスを手に入れることができると思ったから。
イ いつも主役を演じている自分にとって、役者として新たな一面を切り開き、成長することができると思ったから。
ウ うわべだけでなく、内面を深く追求する必要があり、演じる側としては、とてもやりがいのある役だと思ったから。
エ 推薦された役をそのまま演じるよりも、みんなを説得して得た役のほうが、自分の存在感を示せると思ったから。

問二　――線②「そのうちに、詩乃の声がだんだん遠ざかっていき」に見られる七海の状態として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　詩乃が自分の手の届かないところへ行ってしまったようで、とてもさみしく感じている。
イ　七海には、詩乃の演劇教室の話はまったく分からないので、適当にあいづちを打っている。
ウ　一方的に自慢話ばかりする詩乃にうんざりし、飛行機やサイレンに関心が向いている。
エ　七海自身が深刻な悩みを抱えているため、詩乃の話が頭に入らず、うわの空になっている。

問三　――線③「いいよねえ。詩乃には悩みがなくて」とありますが、この時の七海の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　楽しそうな詩乃の姿が、七海の気持ちなどおかまいなしのように感じられている。
イ　すべてをプラスの方向にとらえる詩乃の前向きな姿勢を、うらやましく思っている。
ウ　七海を元気づけるために明るい話題を提供する詩乃に対して、感謝の念を抱いている。
エ　すぐに調子に乗ってしまう詩乃に、親友として弱点を指摘してやろうと意気込んでいる。

問四　――線④「詩乃がわたしの頭の上に手をのせた」とありますが、このときの詩乃のしぐさの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　グチばかりこぼしている七海に、この話は終わりにしようと言いきかせている。
イ　落ちこんでいる七海を少しでも元気づけようと、やさしく励ましている。
ウ　気に病んでいる七海をあわれみ、自分のように前向きに生きるようすすめている。
エ　七海には自分という味方がついているから、何一つ心配はいらないと慰めている。

問五　――線⑤「わたしは詩乃の手をつかんでおろした」に見られる七海のようすとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　自分を見くだしている詩乃にいらだち、腹を立てているようす。
イ　素直な気持ちで詩乃のことばを受け入れることができないようす。
ウ　どうすればポジティブになれるのか、考えようとしているようす。
エ　自分がポジティブでないことに気づき、反省しているようす。

問六　――線⑥「そう、楽しいことだけ考えて！　ファイティン！」とありますが、詩乃がこのように言ったのはなぜでしょうか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　悩んでも問題は解決しないし、自分もつらくなってしまうから。
イ　楽しいことを想像すれば、幸せが向こうからやってくるから。
ウ　同じ考え方をすれば、二人の仲がもっと深まると思ったから。
エ　家族のことだけでなく、自分のことも考えてほしいと思ったから。

問七　――線⑦「いやなやつになっちゃいそう」とありますが、七海は、「いやなやつ」とはどのような人だと考えているのでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　詩乃の弱点を周りに言いふらす人。
イ　詩乃に迷惑をかけてしまうような人。
ウ　詩乃の友情を試そうとするような人。
エ　詩乃をわざと傷つけようとする人。

問八 [1]・[2] に入ることばとして最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア ハラハラ　イ ダラダラ　ウ イライラ　エ ソワソワ　オ モヤモヤ　カ スタスタ

問九 ――線⑧「恵まれすぎている人」とありますが、ここでは誰のことを言っていますか。本文中から三十字以上三十五字以内で探し、初めと終わりの三字ずつで抜き出して答えなさい。

問十 「そうだ。詩乃はいつも[　　]みたいに見える」とありますが、[　　]の中にはどのようなことばが入るでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア なにも考えていない
イ おせじを言っている
ウ 気をつかっている
エ 演技をしている

問十一 ――線⑨「うしろで亮介がまだなにか言いたそうにしていたけど」とありますが、このときの亮介の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 詩乃が七海に直接謝(あやま)ろうとしている、と伝えてあげたいと思っている。
イ 二人の間に何があったのか気になり、七海と話をしたいと思っている。
ウ 七海に、一週間も欠席したほんとうの理由を聞きたいと思っている。
エ けんかの原因はむしろ七海のほうにある、と知らせようと思っている。

問十二　――線⑩「でも、わたしの足は自然と外の郵便受けに向かっていた」とありますが、なぜ七海は郵便受けに向かったのでしょうか。本文中のことばを利用して、「と思ったから。」に続くように、十五字以上二十五字以内で答えなさい。

問十三　――線⑪「なんでこんなに曲がった性格なんだろう！」とありますが、七海が自分の性格について触れている部分をこれより前の本文中から十六字で探し、「性格」に続くように、始めと終わりの三字ずつで答えなさい。

問十四　――線⑫「手のひらにある七枚のふせんを、わたしはそっとノートにはさんだ」とありますが、七海にとって七枚のふせんはどのようなものですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　詩乃が七海にとってかけがえのない友人であることを示すもの。
イ　七海が欠席している間のできごとを知ることのできるもの。
ウ　七海と詩乃の間を取り持ってくれた亮介への感謝を示すもの。
エ　早坂さんが七海を助けてくれたことを思い出させるもの。

三 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

ときどき注文をまちがえてしまうかもしれませんが、どうかご承知おきください。そのかわり、どのメニューもここでしか味わえない、特別においしいものだけを揃えました……。こんな風変わりなレストランがあるそうです。その名も、「注文をまちがえる料理店」。

お客さんからのオーダー(注1)を間違えてしまうって、いったいどういうことでしょう。実は、ホール(注2)で働くスタッフの多くは、認知症(注3)の方々なのだとか。お客さんのところに、注文したのとは違う料理が運ばれても、「こっちもおいしそうだし、まっ、いいかぁ……」と、そのことを受け入れ、楽しんでしまう。このゆる～い雰囲気はとても心地よさそうです。

〈中　略〉

みなさんが「なんだか、幸せ！」を感じる瞬間というのは、どんなときでしょう。ずっと気になっていた数学(注4)の問題がようやく解けたとき、ゲームの一つの場面をクリア(注5)できたとき、みんなで一つの作品を作りあげたとき……などでしょうか。

わたしがここしばらく気になっていたのは、「すごおいしい！　すごくおいしい！」のチキンラーメンです。このラーメンの麺のところには、なぜか「くぼみ」があるのです。ご存じの方も多いことでしょう。

これは「Wたまごポケット」と呼ばれているようです。タマゴをのせると黄身が真ん中のポケットにすっぽり収まり、まわりの縁で白身をしっかりとキャッチするのだとか。よくぞ考えたものです。

ほとんどの方はなにも気にせず、そのままお湯を注ぐだけかもしれません。このくぼみは必ずしもタマゴをのせることを強いてはいないのです。

「あらっ、きょうはタマゴを切らしていた……」

「そんなものをのせたら、スープがぬるくなってしまう！」

「わたしは、麺をそのままかじるのが好きなんだけど……」

と、人はそれぞれ。この配慮はありがたいものです。

タマゴに加え、ネギを刻んでのせてみる、あるいは海苔や薬味をのせて、オリジナルな味を楽しむ。ちょっとした工夫で味もどんどんアップする。そんな楽しみ方もありそうです。こうしたトッピングが楽しめるのも、(注6)ベースにチキンラーメンのしっかりした味付けがあってのこと。わたしたちの工夫とあいまって、オリジナルな味を生みだせるのは、このコラボレーションのなせるワザなのでしょう。

こうして考えてみると、「①今日のは工夫した甲斐があった……」、「なんだか、幸せ！」という幸福感を生みだす上で、この「くぼみ」がカギとなっているようです。

このラーメンの袋の中に、タマゴやネギ、海苔、薬味など、すべてのものが入っているわけではありません。②そこにあるのは麺とその「くぼみ」だけ……。「あとの判断は任せますよ！」ということなのでしょう。わずかな手間や工夫する余地を残しておく。このことがわたしたちの(注8)潜在的な強みや工夫を引き出し、どこか生き生きとした、幸せな気持ちを生みだすようなのです。

すべての具材を提供してもらい、あるいは完全に調理してもらい「利便性」を選ぶのか。それとも③余白を残してもらい「なんだか、幸せ！」な状態に浸るのか。後者の価値観は、先に紹介した(注9)「ウェルビーイング」そのものでしょう。

それを支えるのは、たとえば先ほどの三つの要素です。まず、チキンラーメンのくぼみをどう利用するかを自由に選べること。わたしたちの主体性や創造性までは奪わない。これは「自律性」を(注10)担保することにつながります。

「きょうは、明太子をのせてみようかなぁ……」と、トッピングなどの工夫を重ねることで得られる、自分だけ感。そして「なかなかうまくなったものだなぁ」との有能感。それに、「今日の組み合わせは、抜群！」といった、チキンラーメンの味付けと自分の工夫のコラボレーション（＝関係性）などが、わたしたちのウェルビーイングをアップさせるというわけです。

「おいしいものをいただく、みんなで幸せになる！」、たぶん、みんなが目指しているゴールは一緒なのです。そんなゴール

を共有し、お互いが自分の出来る範囲で貢献しあう。そこでの達成感やつながり感も、「なんだか、幸せ！」につながっているはずです。

その一方で、ちゃんと調理してあげることは、きっと家族の幸せにつながるはずと、張りきって完璧を目指してきたのに、どうも満足してもらえない。そんな疲弊(注11)感を抱くこともあるでしょう。

「わたし、作る人」、「ぼく、たべる人！」、反対に「ぼく、作る人」「わたし、たべる人！」も同様ですが、そんな風に、その役割の間に線を引いた途端に、そこにわずかな距離が生まれ、共感性を失ってしまう。このことは、先にも指摘したことです。

「ねぇ、ちょっと。この味、濃くない？」

「もうちょっと、熱々がたべたいところだけど……」

「たまには、外の中華屋さんに行かない？」

④ せっかくのやさしさが家族の傲慢さを引き出してしまうこともあるでしょう。それでは、家族の関係性を回復させるコツとはどのようなものなのか。「じゃ、ここは手を [1] ておこう！」ではなく、わずかな手間や工夫する余地を残してあげること。たかがラーメンの麺の「くぼみ」なのですが、なかなか深いものだなぁと思うのです。

こうして考えてみると、「なんだか、幸せ！」な状態には、いくつかのタイプがあるようです。ひとつは、テーブルの上においしい料理を並べてもらい、なにも手を煩わせることなく、おいしいものをいただくことが出来たとき。たしかに、「なんだか、幸せ！」を感じる瞬間でしょう。

その他にも、誰かの手助けになれたり、みんなでなにかを成し遂げることが出来たりしたときの満足感、達成感、そしてみんなとのつながりの中で、ちょっとした幸福感に浸ることもあります。

本章の冒頭で紹介した、「注文をまちがえる料理店」の場合は、どうでしょう。おいしい料理を提供してもらう、それだけ

でも十分に幸せなことです。しかし、ホールスタッフの多くが認知症の方々であると知って、お店の中のモード(注12)が一変しました。

お互いの立場を越えて、「みんなでいい感じのレストランにしていこう！」との気持ちを［A］し、「自分にも貢献できることはないか」と［B］しあう。食事のあとの片付けに手を［2］てあげる。いつの間にか、みんなが一つになって、心地よい雰囲気を作りあげている。まさにコンヴィヴィアル（自立共生的）なかかわりを目指すものであり、これはこれで、「なんだか、幸せ！」というわけです。

子どもがようやく歩き始める姿は、どこかほほえましいものです。「思うがまま、移動できる」、「自在にどこにでも！」、子どもにとっても念願だったのでしょう。ようやく移動の「自律性」を手に入れたわけです。

もう一つは、身体の拡張感です。ドキドキしながら一歩を踏み出してみたら、地面がそっと支えてくれた。そのことで「歩く」という行為を手に入れた。地面からの支えを借りながら、上手に歩けるコツもつかめてきた。そのタイミングの取り方や力の加減もわかってきた。あまり意識することはないにせよ、わずかな有能感や達成感を伴っていたはずです。

そして、地面の上を歩くと同時に、その地面が歩かせてくれる。そんな風に地面との間で⑤「ひとつのシステム」を作りあげる。そんな喜びを味わっているようにも思えます。

生態心理学を創始したジェームズ・ギブソンは、「わたしたちは、動くために知覚しなければならない。けれども、知覚するためには、また動かなければならない！」と指摘しました。なにげない街歩きとそれを支える情報との間断のない行為・知覚循環(注13)。これが「その街と一体となった感覚」なのだと思います。

一人で歩けるようになった。ドキドキしつつも、なんだか嬉しい、楽しい。地面との間で「一つのシステム」を作りあげながら、「この街と一体となった感覚」を楽しむ。こうしたなにげない場面でも、ウェルビーイング、［あ］「自らの能力が十分に生かされ、生き生きとした幸せな状態」を生みだしているわけです。

このことは、個人の中に留まるものではないでしょう。［い］、ようやく歩き出した子どもと手をつないで歩く……。こんな些細なことも、わたしたちにとっては楽しみの一つです。なにか目的があるわけではない。ただ一緒に歩くだけなのに、なんだかとても嬉しいのです。これはどうしてなのでしょう。

相手の歩調にも気を配りながら、一緒に歩く。その自由度の一部は制約されるけれど、行動を強いられるほどではない。「自由に、きままに！」と、その自律性は担保されているようです。

もう一つは、どちらに進もうとするのか、どのようなスピードで歩けばいいのか。相手に半ば委ねることが出来、すべての判断を自分の中で囲い込む必要がないのです。あまり気を配ることなく、ただ相手に合わせていればいい……というわけで、ちょっと「エコ」な気分も味わえます。小さな子どもの判断に委ねてみたり、ときには、子どもから頼られたりするって、とても嬉しいものです。

そこで、自分の身体が拡張された感覚やお互いが一体になった感覚も生まれるのではないでしょうか。相手の気持ちを察するということは、相手の志向(注14)を自分の中に住まわせることでもあります。［う］、相手の振舞いに自分の身体を重ねている。こうした「なり込みあう関係」が生まれると、「自他非分離の関係」といって、自分の身体なのか、相手の身体なのか、わからなくなる。「あなた（you）」と「わたし（I）」との関係ではなく、「わたしたち（we）」として振る舞っているようなのです。

このようなモードのことを、認知科学の分野では「we-mode」と呼んでいます。二人の間でゴールを共有しあい、お互いに貢献しあう。そうしたときに生まれる「一体感」のことを指しています。

先の「注文をまちがえる料理店」でも、スタッフたちの「弱さ」をさらけ出すことで、「お店の中のモードが一変することになった」と述べました。「料理を提供する人（you）」と「その料理を味わう人（I）」という立場の違いを越えて、⑥「わたしたち（we）」として、その場を盛り立てよう、楽しんでしまおうということなのでしょう。

（岡田美智男『〈弱いロボット〉から考える――人・社会・生きること』）

（注1）オーダー……注文。
（注2）ホール……飲食店などの、客席がある部屋。
（注3）認知症……脳の障害などにより、記憶力や判断力がにぶる病気。
（注4）数学……数や量、空間図形などについて研究する学問。
（注5）クリア……ここでは、コンピューターゲームのある段階を無事に終了すること。
（注6）ベース……ものごとの基礎となるもの。
（注7）コラボレーション……共同作業すること。
（注8）潜在的……形には表れていないが、中に隠れた状態で存在していること。
（注9）ウェルビーイング……肉体的にも精神的にも健康で、幸福な状態。
（注10）担保する……間違いなく大丈夫だと保証する。
（注11）疲弊感……疲れたと感じること。
（注12）モード……状態。
（注13）間断……切れ目。
（注14）志向……ある方向性を目指すこと。

問一　〰線ⓐ「ご承知おきください」・ⓑ「あいまって」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ⓐご承知おきください

ア　気長にお待ちください。
イ　広い心でお許しください。
ウ　あらかじめご理解ください。
エ　なかったことにしてください。

ⓑあいまって

ア　たがいに反発して、
イ　たがいに関係し合って、
ウ　たがいに力を分け合って、
エ　たがいに長所を取り入れて、

問二　――線①「今日のは」の具体的な内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　今日、家族に作ってもらったチキンラーメンは、
イ　今日、上手にタマゴを落とせたチキンラーメンは、
ウ　今日、ためしにかじってみたチキンラーメンは、
エ　今日、自分が考えて作ったチキンラーメンは、

問三　――線②「そこにあるのは麺とその『くぼみ』だけ……」とありますが、筆者は、それによって何ができるようになると考えていますか。これより後の本文中から二十五字以上三十字以内で探し、「ようになる。」に続くように、始めと終わりの三字ずつで抜き出して答えなさい。

問四　――線③「余白を残してもらい」とありますが、どうしてもらうことでしょうか。本文中のことばを利用して、「こと。」に続くように、二十字以内で答えなさい。

問五　――線④「せっかくのやさしさが家族の傲慢さを引き出してしまうこともあるでしょう」とありますが、その結果、どのようなことが起こってしまうと考えられますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　家族においしいものを食べてもらおうと頑張ったのに、あれこれと注文をつけられ、作った人が疲れてしまうということ。
イ　せっかく思いを込めて作ったのに、味や熱さが家族の好みとは合わず、何度も作り直さなければならなくなるということ。
ウ　家族への思いやりが相手に伝わらず、それぞれの要求がエスカレートしていき、やがて家族が分裂してしまうということ。
エ　どんなに頑張っても、みんなにとっておいしいものが作れないので、結局は外食のほうがよいと思ってしまうということ。

問六　1・2 に入ることばとしてふさわしいものをそれぞれ次の［　　］の中から選び、適当な形に直してひらがなで答えなさい。

かす　かりる　つける　ぬく　ひく

問七　A・B に入ることばの組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　A 予想　B 協力　　イ　A 共有　B 工夫
ウ　A 回復　B 提案　　エ　A 優先　B 反省

問八　――線⑤「地面との間で『ひとつのシステム』を作りあげる」の内容を具体的に述べている段落を本文中から探し、始めの五字で答えなさい。

問九　あ ～ う に入ることばとして最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　だから　　イ　しかし　　ウ　たとえば　　エ　あるいは　　オ　つまり

問十　――線⑥「『わたしたち（we）』として、その場を盛り立てよう、楽しんでしまおうということなのでしょう」とありますが、具体的にはどうすることですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　注文したのとは違う料理が運ばれてきても、そのことを気持ちよく受け入れようとすること。
イ　注文が多くて料理がなかなか提供されなくても、感謝の気持ちを忘れないようにしようとすること。
ウ　いつになったら料理が出てくるかまったく分からなくても、運ばれてくるまで、辛抱（しんぼう）強く待とうとすること。
エ　自分だけのために出してくれる特別な料理なのだから、注文を間違えても文句を言わずにおこうとすること。